

サーサナ

第55号 仏暦2565（西暦2022）年3月12日

アショカ王の平和主義

釈尊在世当時、インドには様々な国があり、その中でも16大国が覇を競っていました。なかでも、マガダ国、コーサラ国、ヴァッジ国には釈尊がしばしば巡行し教化活動を行っていました。有名なエピソードですが、マガダ国がヴァッジ国を征服しようと画策し、王が家臣を派遣して釈尊に助言を仰いだところ、釈尊は「ヴァッジ国の人々は和合し、道徳を尊重している限り、滅びることはありえない」と答えたといえます。

しかし、世の中は理想通りにはいかないもので、やがてマガダ国は周辺の大中小の国々を次々と征服、従属させていき、紀元前4世紀に成立したナンダ朝が勢力を伸ばし、その後を受けたマウリヤ朝の第3代アショーカ王（阿育王、B.C.304-232）の時代にはインド亜大陸のほぼ全域を支配するまでになりました。この王は元来性格が凶暴で、王位争奪のために多くの兄弟を殺し、戦闘を繰り返したと言われています。アショカ王が改心したきっかけは、カリンガ国との戦争でした。アショカ碑文には「15万人が捕虜としてカリンガから連れ去られ、15万が殺害され、その何倍もの人々が亡くなった」とあります。戦場に累々と横たわる死体、その凄惨なありさまを見て、王に後悔の念が生じたことでしょう。そして王は仏教に心を寄せるようになりました。

その後、王は仏教布教のため役人を任命して国内各地を巡回させ、国外へも遠くギリシャにまで使節を送って法の宣揚に努めました。仏教が世界に普及した原動力となったわけです。ここからアショカ王は「転輪聖王」と讃えられるようになりました。「転輪聖王」とは、武力ではなく法（ダルマ、道理・真実・倫理をここでは意味する）によって統治することを旨とする理想的な君主のことで、仏教経典でもしばしば登場します。王は実際に、武力行使を止めただけでなく、療養所などの福祉事業を数多く手がけていきました。王はまた、自らは仏教徒でありながら、ジャイナ教などの他の宗教も手厚く保護し、諸宗

教への敬意と宗教間の寛容を重視しました。

王の次の勅文は特に留意に値します。「人はすべてわが子である。自分の子供たちに対してこの世と次の世での安寧と幸福を願うように、私は人々すべてについて同じことを願う。わが領域の外にある国々のものたちは、私の彼らに対する意図がどういうものかを知りたく思っているであろう。彼らは私を恐れず、信ずればよい。私がかたがた望むものは幸福であり、物惜しみではない。また私は、罪を犯した者でも赦さるべき者は赦すであろう。」（カリング碑文2）

アショカ王が武力を放棄した結果、周辺諸国が反乱を起こしたという事実はないのですが、後継者の問題で王朝は分裂してしまいました。結局は滅亡してしまったとはいえ（諸行無常ですからこれもいたしかたないことです）、その精神は今日に至るも語り継がれています。

同時に、私が感じたのは「人間は変わることができる」ということです。極悪残虐な王が一転して平和主義者になった、という事実。ここから私たちは大切なことを学ぶことができますでしょう。



教心寺ライブラリーから (6)

ワールポラ・ラーフラ著、今枝由郎訳『ブッダが説いたこと』

(岩波文庫、2016年)

本の帯には「ヨーロッパで半世紀にわたり、最も読まれてきた仏教概説書」と紹介があります。原著は“*What the Buddha Taught*”、1959年の出版です。著者はスリランカの学僧ですが、テーラヴァーダ（上座部）だけでなく、大乘仏教にも目配りの行き届いた明晰な解説です。

日本語訳書では、漢語の仏教用語を極力避けて、現代の日常用語を使っていることが特筆されます。例えば、伝統的に「戒・定・慧」と呼び習わされている実践項目は、本書では「倫理的行動・心的規律・叡智」とされています。これは英文の用語（*ethical conduct, mental discipline, wisdom*）を、そのまま訳しているわけで、これによって、仏教の初心者にはかえって分かりやすくなっているかと思えます。

結語を抜粋します。「力の均衡による、あるいは核兵器の脅威による平和維持は愚かである。武力が生むのは恐怖でしかなく、けっして平和は生まれえない。恐怖によって真正な、永続的平和が維持されることはありえない。（・・・）真実で真正な平和は、恐怖、猜疑、危険から解き放たれたメッター、すなわち友愛の雰囲気の中にしか出現しない。」

法要行事について

各法要・行事に必要な勤行本は、お持ちでない場合は当寺より進呈または貸与いたします。念珠は必ずご持参ください。また肩衣の着用を推奨します。



三月 涅槃会 (ねはんえ)

兼 年間物故者追弔会

兼 春彼岸会

涅槃会とは、釈尊の入滅（入涅槃＝完全なる安らぎである死を迎えられたこと）を記念する法要です。本法要にあわせて、2021年の間に亡くなられた当寺御門徒を追弔いたします。また兼ねて春彼岸法要ともなります。

❖日時 3月20日（日）午後2時～4時【午後1時半より受付】

❖内容 年間物故者追弔のこたば
勤行（和文仏教聖典読誦、正信偈同朋奉讃）
住職法話

❖持ち物 『和文仏教聖典』、『正信偈同朋奉讃』（または『真宗大谷派勤行集』）

❖記念品 和ろうそく



四月 花祭りコンサート

2年続けて休止をしていましたが、今年は実施します。今回は「灌仏会」の法要はありませんが、地域公開行事としてピアノコンサートを開催します。お友達などにもお誘いをかけていただきたく、チラシを同封しました。

❖日時 4月9日（土）午後2時～3時

❖入場料 1000円（中学生以下無料）

❖演奏 小島千加子

❖曲目 「幻想即興曲」「千本桜」
「はなみずき」など



五月 永代経

子々孫々、永代にわたって、浄土三部経が読誦され、仏法が伝えられることを願いとする法要。御懇志を頂いたお方の法名を記した掛け軸をお掛けします。（「永代経」という名前のお経があるわけではありません。）

なお、永代経のご懇志については随時受け付けています。

- ❖日時 5月25日（水）
午前法座は午前10時から
午後法座は午後1時から（午後2時半頃まで）
- ❖内容 勤行（無量寿経・阿弥陀経訓読、正信偈）、法話（石原和久師）
- ❖持ち物 勤行本『正信偈同朋奉讃』『真宗法要聖典』
- ❖お齋（昼食）があります（持ち帰り可）
- ❖記念品 特製ボールペン

ネットで仏教（2） - 真宗大谷派名古屋教区第30組

真宗大谷派は全国を30の教区に分け、各教区は更に組（そ）という名の小教区に区分しています。教心寺は名古屋教区第30組<<https://www.nagoya30.net>>に所属しています。このウェブサイトは2006年に開設をしましたが、当時はまだ、組の単位でウェブサイトをもつことは先進的な取り組みでした。実は、第30組のサイト作りを提案し実行したのは私でした。私はそれ以前に、教区のウェブサイト作りに関わっていたので、その経験を活かせると思ったのでした。組の他の寺院からは「そんなことして意味があるのか？」という疑問の声もあった中で、着実に内容を拡充してアクセスを増やしていくことができました。

特にアクセスが多いのが「学ぶ・考える」の中にある「お経を聞く」のコーナーです。正信偈を音声で聞くことができます。他にもいろいろなコーナーがありますので、ぜひアクセスしてみてください。

携帯サイト

真宗大谷派 名古屋教区 第30組の携帯サイトはこちらからどうぞ。



真宗大谷派 教心寺（名古屋教区第30組）

編集発行人 釋眞弼（山口眞一）

468-0026 名古屋市天白区土原3丁目205番地

電話：801-1381 FAX：807-1198 電子メール：kyosin@nagoya30.net

URL <http://www.nagoya30.net/temple/kyosin/>
